

R8 まなびフェスト・そだてフェスト評価結果の分析と考察

まなびフェスト・そだてフェスト評価結果の分析

【知：かしこく】自律的な学習習慣の形成

「授業がよくわかる」という項目は全校平均で児童評価 3.5、保護者評価 3.3 と概ね良好である。

学年が進むにつれて「勉強がすき」の数値が低下する傾向にある。

家庭学習・読書は、児童評価はいずれも 3.1～3.4 と、目標の 3.5 に届いていない。特に「家庭での読書」は保護者評価も 2.7 と全項目で最低値であり、家庭での習慣化に課題が残る。

【徳：やさしく】高い満足度と良好な人間関係

「学校は楽しい」という項目が児童評価 3.6、保護者評価 3.3 と概ね良好である。また「なかよく助け合い」も児童評価が 3.6 と高く、情緒的な安定感と絆づくりが本校の強みのひとつである。

「自己肯定感」は児童評価 3.3 であり、他者への思いやりは高い一方で、自分自身の強みを自覚する点には改善が求められる。

【体：たくましく】メディア利用習慣が最大の懸念

「早寝・早起き・朝ごはん」の生活基盤は保護者評価 3.2 と一定の水準を維持している。

「居間 8 ルール」が 2.7 と全項目で最低値となっています。家庭でのルールの徹底が喫緊の課題である。

考察と今後の方向性

1 学習意欲と家庭学習の再構築

5・6 年生において「勉強が好き」「家庭学習に取り組む」の数値が低い点は、中学校進学を見据えた喫緊の課題である。単に時間をこなすだけでなく、「わかる・できる」という実感を持たせる授業改善や、自分の興味関心に基づいた家庭学習（一人勉強）のあり方を再提示すること。

2 コミュニケーション能力（話す・聞く）の育成

「話す・聞く」については、全教科を通じた言語活動の充実が必要である。相手の反応を確かめながら話す、多様な意見を尊重して聞くといった、「共感的人間関係」の児童評価 3.7 の強みを活かした対話的な学びの場を増やすこと。

3 保護者評価への注目

「家庭学習」において、児童評価 3.4 に対し、保護者評価 3.2 と低い傾向にある。これは、児童本人は「頑張っている」と感じている一方で、保護者が「十分ではない」と見ている。児童・保護者面談を通じ、家庭での頑張りを具体的に価値付けし、今後さらに児童の自信につなげていくこと。

4 読書習慣の定着

「家庭での読書」の児童評価 3.1 と低い。特に、3 年生 2.4、3 年生 3.0、5 年生 3.1、6 年生 2.8 は大きな課題である。保護者評価では 5 年生 1.9、2 年生 2.3、3 年生 2.8 と低い。居間 8 ルールとの関連も含め、家庭で本に触れる時間をどう確保するかが今後の検討材料である。

追記

「授業がよくわかる」の評価 3.5 と良好基準に達している。引き続き、思考の言語化に不安を感じている児童への指導において、全体での発表の前に、隣同士で自分の考えを伝え合う時間を 1 分間設けるなど、アウトプットの機会を意図的に増やす。

各授業の終わりの振り返りは、子ども自身が自分の学びのプロセスを客観視（メタ認知）し、次の学習を自分で調整する力を育む重要なプロセスである。単なる「楽しかった」という感想で終わらせず、具体的な気づきや学び方を言語化する機会が求められる。